

第47回 Kozoom28 「お稲荷さんにお詣りして」

清水健二

今回は「お稲荷さん」こと「稲荷神社」について、蘆薈(うんちく)を傾けたいと思う。

桜が咲き始めた3月末、京都伏見の伏見稲荷大社を訪れた。全国に約3万社ある稲荷神社の総本山で、私は過去にも何度か訪ねていて馴染の大社である。この大社は写真の被写体として四季を通じて味わいのある作品が撮れるので、写真仲間とよく出かけている。この度も仲間誘われて出かけた。伏見稲荷大社は本殿から裏山へ、山頂までトンネル状に赤鳥居が建ち並び、途中には大小数々の社があって夫々にキツネの像が鎮座している。一つとして同じものは無いといわれ、どれも表情豊かな顔をしている。

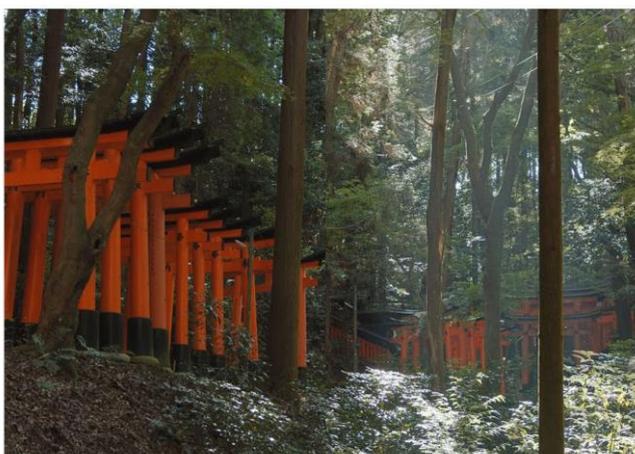
玉や巻物、稲穂、鍵などをくわえていて眺めているだけで楽しいし、玉は霊力を備え、巻物は経文であり、鍵は大切に保存する米倉の鍵である。夫々の役割を持ったキツネたちが見守ってくれている。参道から脇道に入ると竹林があったり、池や森など神秘的で自然豊かな景観をあげられる。標高233mで、約4kmの山道を登り、頂上からは京都市街が遠望できる。



千本鳥居の参道トンネル



無数にあるキツネと祠



神秘的な赤鳥居と森林



山頂まで続く赤鳥居



外人観光客の稲荷大社

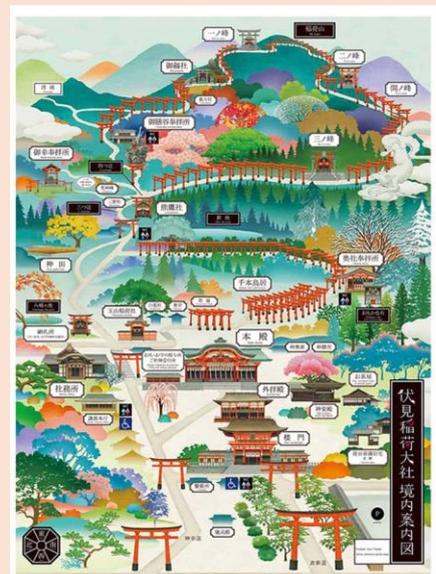


和服の観光客

すでに10年も前から日本へ旅行する外国人は京都・奈良を巡るコースにこの伏見稲荷大社が紹介されていてよく見かけたものだったが、今回立ち寄って驚いたのは、広い境内のみならず、参道は人の波で渦巻いていた。年明けから円安とコロナ禍が下火になったこともあり、訪日旅行者が急増したようである。昨年度のインバウンドに人気のある場所の第1位はこの伏見稲荷神社であるという。2位は東京・秋葉原、3位広島・原爆公園、以下広島・厳島神社、奈良・大仏殿、京都・清水寺・・・と続く。

はてさて、どうして伏見稲荷神社がトップなのか、しかも東洋人以上に欧米人の多いのに実は不思議に思った。日本の四季の美しい自然風景を楽しみ、日本の文化の中心的役割をしている社寺仏閣に日本らしさを求めて訪日してきた外国人達も、最近では自分たちが体験できる観光を楽しむ傾向に変わってきたようである。そして自分たちの行動をスマホを利用して、日本の事物と自撮りした写真をSNSで発信し楽しむのが流行していて、デジタル化時代の通信技術が世界的に普及してきた事によるようだ。稲荷大社の朱と青そして金色の華麗な拝殿や本殿の前で、貸衣装屋で借りた着物姿の写真を撮ったりしている人が多い。赤鳥居の並ぶ参道では、頭上高くスマホを掲げた人の波でごった返していた。また大社の周りの店や屋台では、たこ焼きや串カツの類を立ち食いしている人達等々で、まるで祭りの日のような賑わいを呈していた。静かな片田舎の街の風景をこんなふうで紹介されては、この地に居住する一般の人達はたまらないだろうと感じた。いわゆるオーバーツーリズムと言うことだろう。

稲荷大社の奥山めぐりは大小様々な社や祠(ほくら)があり、赤鳥居とキツネ像がセットになり、お詣りの人たちの灯明をあげるロウソクの火は実に神秘的で、本坪鈴(ほんつぼすず)のガラガラ音や拍手を打つ音色は、祈る人と神様との出会いの



稲荷大社の山巡り図

挨拶のように感じられる。外国人は日本人の素朴で伝統的な祈りの所作を観ることができることや、山巡りでトレッキングできる事などから人気があるのだろうと思えた。歩くことの好きだった私も最近足腰が弱ってきて今回山巡りはできず残念だった。

さて、伏見稲荷大社は外国人にとって華やかな社殿や、赤鳥居とキツネ像に惹かれているようだが、これが日本の代表する宗教社殿の一つだと勘違いされているのかと気になった。日本人が日頃接している社寺は、質素で古色蒼然の趣があり心の落ち着くところである。日本中どこへ行っても、お寺がありお宮さんがあって、日常の暮らしの中で身近な祈りの対象として、手を合わせ、困った時の神頼りにお賽銭をあげることが多い。こどもができたので宮参りをし、新車を買ったので護符をいただきに、家を建てる前に地鎮のお祓いと、お願い事のいかに多いことかと思う。毎日の生活の中でも散歩道の途中、気軽に社寺に立ち寄れるし、特にお稲荷さんはお宮にもお寺にも属していて親しみやすい存在である。もともと古代には稲の神をお祀りして五穀豊穡を祈願し、キツネは祭神の守護役でありお使いの役を担っていたが、江戸時代に商業が発展し、商人が商売繁盛を願って広めていったという。現在でも企業が工場内や街中のビルの屋上に稲荷社を建てお守りをしているほどに発展してきている。年に一度や二度、総本山に祈願と成就のお礼に赤鳥居を奉納してきたことから、今では千本鳥居も益々増え続け数千基の数になってきている。鳥居は俗世界から神域に入る結界の標しで、朱色は悪霊払いのための彩色である。本来なら鳥居を潜ったら気持ちを正し、敬虔に祭神に向かうべきだと思うが、稲荷神社の祭神は誰かなど意識もしないでお祈りする人が多い。まして異国人は全く頓着しないから、まるで物見遊山の神域になっている。かく言う私も熱心な信者ではないが、自然の恵みを楽しみ、災害の無いことを祈り、八百万の神への崇拝と感謝は怠らないでいる。また仏教に対しても謙虚に教えを受け、生死のあり方を考えながら日々過ごしているつもりである。



ビルの屋上に安置した稲荷神社

日本人の宗教観は暮らしの中に溶け込んでいて、日本人の6~7割が「私は無宗教です」とか「無信仰です」と言うわりに日常的に「祈り」の多い生活をしていると私は感じている。特別に信仰する神仏をもっている人を除いて、多くは神道と仏教の教えを基に道徳や倫理観を備えていて諸外国に比べてレベルは高いと私は確信している。他人に親切で、おもてなしの心があり、礼儀正しく、控えめで、約束を守り、等々美德に長けている。神仏に対し畏敬の念を持って律儀な生活している人は多い。「無宗教」と言っているだけで、事ある毎にいつも縁起を担いたり、バチ(罰)が当たるとか、ちょっとお参りに行ってくると神頼りの日々を送っているのが日本人の本来の姿である。そして日本の文化はそんな中で育ってきたことを、来日者によくPRし知ってほしいものだと思っている。